

私たちから始める小さな一歩

加古川市立平岡中学校 三年 長井 桜

私の弟は、障がい者です。ダウン症で知的障害があります。小さい時から弟と一緒に暮らしているので、障がいという存在が身近にありました。障がいと関わりの少ない人達は、障がい者にどのようなイメージや思いを持っているのでしょうか。

弟と出かけている時、弟が突然大声を出したり、ズボンを脱いだりすることがあります。その様子を見た人たちは、驚いたり、ジロジロ見たりします。時には嫌そうな顔をします。きっと、弟の行動が理解できず、奇怪に感じたのでしょう。弟だけでなく、他の障がいがある人の行動に、冷たい目で見ている人達に出会うことがあります。ニュースやインターネットでも、障がい者に対するいじめの報道や誹謗中傷の書き込みを目にすることもあります。

これらのことから、障がいに対するマイナスなイメージを持つ人がいるように思います。私の弟がそのように見られていると思うと、胸が痛くなります。その一方で、弟や障がい者に対して、温かく接してくれたり、優しい目で見てくれたりする人もいます。私のように、家族が障がい者であれば、障がいへの理解が生まれてくるけれど、そうでない人達にとって、マイナスなイメージがあることは仕方がないことかもしれません。障がい者への理解が深まれば、障がい者だけでなく健常者も共に安心して暮らせる社会になると私は思っています。そのために、障がい者について、私が、伝えたいことが二つあります。

一つ目は、障がい者の言動には、本人の意思や思いが詰まっているということです。弟は、大きな声や物音を好みます。大きな音を出す為に、物を落としたり、机に物を叩きつけたりします。また、大声を出して反応してあげると、喜びます。周りからすると、耳が痛いほどの音で不愉快です。不愉快なほどの音を弟が好むのには、理由があります。弟には難聴があるからです。健常者からすれば、大きすぎる音ですが、弟にとっては、適切な音量だったのです。

また、ズボンを脱ぐ行動にも理由があります。それは、トイレのサインです。弟は発語がありません。そのため、今、ズボンを脱いでトイレを知らせる訓練をしています。知的障害もあるため、公衆の場であっても、ズボンを脱ぐことが恥ずかしいことと理解できません。家族にとっては、弟の行動が理解できるけれど、他人から見れば、不愉快な思いにさせると思います。このように、理解しづらい行動にも、障がい者の意志や思いがあるのです。障がい者の理解できない言動に出くわした時、何かを伝えたり、表現したりし

ているのだと思ってほしいです。

さらに、通りすぎるだけの関係ではないのならば、その言動にどんな思いがあるのかを、知ろうと寄り添ってあげてくれたら嬉しいです。相手の思いが理解できた時、分かってもらえた本人も、気づけた自分自身も喜びを感じることができると思います。

二つ目は、障がいがある人も、私たち健常者と同じように、家族から愛される存在であるということです。障がいの種類や程度によって、生活に生じる困難さは人それぞれです。私の祖父は、昨年心臓にペースメーカーを装着し、障がい者として障害者手帳を持つことになりました。電磁波などに、注意が必要になりますが、今までの生活とあまり変わりません。弟は、食事やトイレなど全てに支援が必要で、1人でできることが少ないです。

それでも、家族や周りの人に支えられながら、リハビリに行ったり、訓練を重ねたりしながら、自立を目ざしてよりよく生きていけるようにがんばっています。祖父も弟も、私にとってかけがえのない大切な家族です。弟やもっと重度の障がいがある人たちの人生を不びんに思う人もいると思います。中には、障がい者の存在を否定する人もいます。

もし、自分の家族が障がい者だったら、そう思うでしょうか。障がいがある日突然、他人事ではなくなることもあるのです。障害者に対して、否定的なとらえ方をせず、一人の人間として、家族として、愛される大切な存在であると知っていてくれたら嬉しいです。みんなが、そのような考えを持つことができれば、障がい者に対して、温かい社会になるのではないのでしょうか。

以前に比べ、障がい者への理解が変化しつつあります。例えば、「障害者」から「障がい者」へと変更されてきています。「害」の与える印象を取り除くためです。また、「特別支援学級」が「障害児学級」などとされていた頃があったそうです。障がい者が、さらに生きやすい社会にするためには、福祉施設や制度の充実も大切だと思います。しかし、中学生の私たちに、それらを変えることは難しいです。障がいへの理解を深めることはできます。障がい者と健常者の共生を目指して、私たちから小さな一歩を始めませんか。